BEST SHINSHO

大東亜戦争で日本はいかに世界を変えたか

加瀬英明

Kase Hideaki

大東亜戦争で日本はいかに世界を変えたか　加瀬英明

ISBN978-4-584-12475-8
C0230　¥830E

定価：本体830円＋税

加瀬英明（かせ ひであき）

1936年東京生まれ。外交評論家。慶應義塾大学、エール大学、コロンビア大学に学ぶ。「ブリタニカ国際大百科事典」初代編集長。1977年より福田・中曽根内閣で首相特別顧問を務めた。日本ペンクラブ理事、松下政経塾相談役などを歴任。著書に『イギリス 衰亡しない伝統国家』（講談社）、『天皇家の戦い』（新潮社）、『徳の国富論』（自由社）、『アメリカはいつまで超大国でいられるか』（祥伝社）、『中国人韓国人にはなぜ「心」がないのか』（KKベストセラーズ）など。

日本国民が70年目の真実
人種差別の歴史に終止符を打った!

肌の色が違うがために辱められ、
惨めな境遇を強いられてきた民が、
日本の働きによって重い鎖から解き放たれた。

『ニューヨーク・タイムズ』元東京支局長
ヘンリー・S・ストークス氏 推薦

「自存自衛」、そして「人種平等の理想」
日本人はそのために戦った!

- 自国民まで欺いたルーズベルト大統領の騙し討ち
- 大東亜会議は有色人種のリーダーが集った人類史上初のサミット
- 戦争体験が風化するにつれ正気を失った日本人
- 『ポツダム宣言』は日本の無条件降伏を要求していない
- 自虐史観を蔓延させた心ない日本人こそ戦勝国の傀儡
- 世界から賞讃された特攻隊の精神
- 神道に深く魅せられたジョン・レノンの靖国参拝
- 「国際連合」という誤訳が日本国民の世界観を歪めた

ベスト新書

KKベストセラーズ
定価◎本体830円＋税

ベスト新書 475

目　次

第一章　日本が敗れる日まで　9

日本軍はいかに戦ったのか／天皇の防空施設／昭和天皇の御聖断／未遂に終わったクーデター／本土決戦か否か／最後の御前会議

第二章　仕組まれた対米戦争の罠　33

日米開戦の嘘／ルーズベルト大統領の中国贔屓／曲解された中華事変／中国に派兵された義勇兵／極秘裏に発足したSR／自国民まで欺いたアメリカの騙し討ち／日本を追い詰めた経済封鎖／想定していなかった戦争／ルーズベルト政権の陰謀／真珠湾攻撃と独り芝居の終わり／リンドバーグの日記

第三章　大東亜会議と人種平等の理想　57
屈辱的な不平等条約の撤廃／白人が拒否した人種差別撤廃／有色人種の光だった日本軍の進攻／有色人種のリーダーが集った大東亜会議／インド人から感謝される日本／大東亜会議は世界史の転換点／日本軍に協力した現地人

第四章　アジア諸民族を鼓舞した気高い精神　77
インパール作戦がもたらしたインドの独立／戦争未亡人からの手紙／皇紀による年号が刻まれたジャカルタの独立記念碑／若者の心を打った『プライド運命の瞬間』／自存自衛の精神を復元する／シアヌーク国王が演じた日本兵／対日協力者は民族の功労者

第五章　白人による人種差別からの解放　99
人種差別に対する昭和天皇の想い／自存自衛とアジア解放／国際法の権威も「東京裁判は違法」／百六十四の独立国が誕生／差別なき日本の統治／協力的だった日本統治下の朝鮮人／白人にとってのインデアン／馬房に押し込められる日系アメリカ人／人間扱いされなかった日本兵／トルーマンもマッカーサーも人種差別主義者／「日本民族を絶滅させるべきか」という質問／ニュールンベルク法より苛酷な黒人差別／差別主義的なアメリカが民主主義国といえるか

第六章　日本軍の「精神第一主義」　127
「転進」と「玉砕」／三八式歩兵銃にみる火力の差／日本軍の精華とされた白兵戦法と弾量の差／「バンザイ攻撃」と日本将兵の敢闘／死ぬために戦うとは／神風特別攻撃隊／終戦の方策のない対米戦争

第七章　特攻隊はなぜ讃えられるのか　147
ソ連の自爆機とドイツの特攻隊／世界で読まれる『神風・日本の特攻神』／「万朶隊」と「富嶽隊」／特攻隊にみる至純な愛国心／教養高き日本の庶民／日本が実現した人種平等の世界／世界で賞讃される特攻隊／東京大空襲は大虐殺／西洋人と日本人の戦争観

第八章　アメリカと日本の原爆　169
不要だった原爆投下／日本が原子爆弾を持っていたら／原爆投下部隊の最後の戦友会／原爆投下が日本人を救ったと考えるアメリカ人／日本人とドイツ人との扱いのちがい／『ポツダム宣言』は日本の無条件降伏ではない／アメリカを恐れさせた日本軍／特攻隊は無駄死ではなかった／軍歌が愛唱される日本

第九章　歴史を歪められた国　193
GHQの仕掛けた歴史戦／東京裁判を再審せよ／歴史を歪めるアメリカ／戦犯釈放への国民の願い／自虐史観を蔓延させた心ない日本人／愛国心は罪なのか／独立国としての気概

第十章　日本人が成し遂げたこと　209
日本が人類史に果たした役割／日本人の心は壊れない／「無条件降伏」へのすり替え／「国際連合」は「連合国」／言葉の呼び替えによる誤魔化し／日本の包装文化／『六法全書』に記載されたアメリカ独立宣言文／精神を重んじる国民性／ジョン・レノンが賞讃した神道／特攻隊に現れた感謝の心／感性を尺度にした日本人／神々も人民も平等な社会／ルーズベルトが暗殺されていたら

おわりに　237

第一章　日本が敗れる日まで

日本軍はいかに戦ったのか

戦後七十年に、考えたい。

なぜ、日本は対米戦争を戦ったのだろうか？

今日、日本国民の多くの者が、軍部が暴走したために、無謀な戦争に突入したと思っている。

だが、よく考えてみたい。国民が騙（だま）されて、戦争に引きずり込まれてしまったというが、それほど国民は愚かだったのだろうか？

日本の勝利は開戦後、六ヶ月しか続かなかった。日本はミッドウェー海戦に敗れてから、守勢に立たされて、アメリカ軍の反攻を必死になって、くいとめようとして、戦った。

昭和十八（一九四三）年五月、はじめにアッツ島の守備隊が玉砕した。アメリカ軍は日本軍が守る太平洋の島々を、つぎつぎと攻略していった。

日本軍はどの島においても、完全に孤立無援の状況に置かれたにもかかわらず、全滅するまで戦った。

日本軍は、アッツ島から、タラワ島、マキン島、クェゼリン島、エニウェトク島、サイパン島、テニアン島、グアム島、パラオ島、ペリリュー島、アンガウル島、モロタイ島、硫黄島をはじめとして、名も知れぬような数多くの島々で、玉砕していった。

『アメリカ太平洋戦争公史』によると、日本軍がいかに戦ったのか、克明に記録されている。

アッツ島では二千三百五十人の日本守備隊のうち、捕虜となった二十九人を除いて、全員が戦死した。戦死率は九十八・八％だった。タラワ島では二千五百七十一人の守備隊のうち、八人だけ捕虜となったから、戦死率は九十九・七％にのぼった。クェゼリン島の戦闘では、四千九百三十八人のうち、七十九人が捕虜となったのを引いて、戦死率が九十八・四％だった。サイパン島では、約三万人の日本将兵の九十七％が、戦死した。

世界の戦史で、これほど最後まで戦った軍隊は、他に例がない。

公史には、アメリカの指揮官たちが、「日本軍がまったく死を恐れずに戦うのは、まるで月の裏側（トゥ・ディ・クライブ・ジ・アナザー・サイド・オブ・ザ・ムーン）を描写するようなものだ」と語り、「世界史上で、これほど勇敢な軍隊は存在しない。アメリカ兵だったら一人ひとりが、最高勲章（コングレッショナル・メダル）を授けられよう」と感嘆したと、記されている。

月面の裏側は、戦後、探査機が月を一周するまで、見ることができなかった。

昭和十九（一九四四）年十月に、アメリカ軍がフィリピンのレイテ島に上陸すると、は

じめて神風特攻隊が編成されて、敵艦に突入していった。

昭和二十年八月に日本が敗れる日まで、航空、水中、海上特攻が敢行された。

私はこれまで、どうして日本が大規模な特攻隊を編成して戦った、唯一つの国であるのか、将兵がどの戦場においても、最後の瞬間まで戦ったのか、その答を求めてきた。

日本は昭和二十（一九四五）年八月に、アメリカに対して三年八ヶ月にわたって、国をあげて戦って、敗れた。

七月二十四日に、アメリカの統合参謀本部は、九州南部に上陸する『オリンピック作戦』を十一月一日に開始するように、命じた。

『オリンピック作戦』では、九州南部の三十五ヶ所の上陸予定地点に、無数の航空母艦、戦艦、巡洋艦などによって援護された十四個師団、四十七万七千四百人の将兵が、一千三百十八隻の輸送船から上陸用舟艇に移乗して、殺到することになっていた。

『オリンピック作戦』は史上最大の作戦となるもので、前年六月に連合軍がフランスに上陸したノルマンディー作戦よりも、規模が大きなものだった。

アメリカは力の絶頂期にあったが、日本は継戦能力をほとんど失っていた。

アメリカの統合参謀本部は関東の相模湾と、九十九里浜に上陸する『コロネット作戦』

を、昭和二十一（一九四六）年三月一日に行うことを、決定していた。

『コロネット作戦』は『オリンピック作戦』の規模を、さらに大きく上回ることになっていた。

八月十五日に、昭和天皇が前日、自らマイクの前に立たれて録音した終戦の詔勅が、全国民にラジオ放送を通じて、戦争に敗れたことを、告げた。

その五日前の未明に、皇居の吹上御苑で開催された御前会議において、連合国に降伏して、戦争を終結することが、決定された。

戦後七十年の平成二十七（二〇一五）年一月に、宮中一般参賀のために、八万二千人の善男善女が皇居を訪れて、日の丸の小旗を振りながら、さかんに万歳を唱えた。

今日も、天皇皇后両陛下が、吹上御苑に住まわれている。

天皇の防空施設

昭和十六（一九四一）年十二月に、戻ろう。

開戦後に、極秘裏に吹上御苑のなかに、二つの防空施設がつくられた。

一つが、天皇皇后が万一の空襲に備えて、一時的に避難されるための防空舎であり、秘(ひ)

匿名を「御文庫」といった。

同じ時に、そこから北のほうへ百四十メートルほど離れて、空襲下で御前会議が開かれる場合を想定して、十五坪ほどの会議室と御居間がある防空室が、つくられた。吹上付属室とも、御文庫付属室、大本営付属室とも呼ばれた。

御文庫は地上一階建てで、どのような大型爆弾であっても、耐えられるように、一メートルのコンクリートの層の上に砂を一メートル積み、その上をさらに一メートルのコンクリートの層によって、覆っていた。

なかは、御車寄せからホールに入ると、東西に分けられ、狭い部屋ばかりだったが、東側に、天皇の御政務室、御謁見所、御食堂、寝室である御寝所、湯殿、常侍官候所、西側に皇后用の御居間、御寝所、御服所、湯殿、女官候所などが、東西合わせて十五室あった。

御文庫には、さらに地下二階に、空襲の場合に、天皇、皇后のいっそうの安全をはかるために、御避難所と呼ばれる防空室がつくられていた。十二畳ほどの御居間と、御寝所があった。

天皇、皇后は、サイパン島が昭和十九（一九四四）年七月六日に、アメリカ軍によって攻略されて、B29編隊による東京空襲が始まると、御文庫で常時、生活されるようになった。空襲警報が発せられると、警報が解除されるまで、地下の御避難所に移られた。

そして、昭和二十年五月に入って、沖縄守備軍が圧倒的なアメリカ軍に対して戦っていた時に、近衛師団から数千人が動員されて、吹上付属室の対弾性を強化する工事が、一日二十四時間、三交替ですべて人力によって行われた。

海外の新聞に、アメリカ空軍がヒトラーのベルヒテスガーデン山荘に対して、十トン爆弾を投下したという記事が載ったことが、伝えられたので、強化工事が行われることになった。それまで吹上付属室は、二トン半爆弾にしか耐えられなかった。

御文庫と御文庫付属室には、それぞれ小さな倉庫がつくられたが、前輪を外して、後輪を浮かして固定した、自転車が置かれていた。

外からの送電が停まって、自家用発電機が故障した場合に、侍従が交替でペダルを漕いで、発電することになっていた。

ペダルを漕いだことがあったという、侍従の話をきいたが、夏は暗い倉庫のなかは蒸暑く、粗末な紺の防空服がずぶ濡れになったうえに、食糧事情が悪く、力がでなかったから、苦労したという。

昭和天皇の御聖断

昭和天皇は、昭和二十年八月九日のもうあと十五分で、日付が十日に変わろうとする午後十一時四十五分に、大元帥の陸軍軍装に元帥刀を下げて、御文庫の廊下の東端から、地下道へ降りていかれた。

コンクリートの階段が終ると、薄暗い坑道にでる。ようやく一人が通れるほど、幅が狭い。黄色い裸電球が間隔を置いて、天井から下っている。地面の上に、板が敷かれている。坑道が左に曲るように、続いていた。

天皇は侍従武官長のあとを、黙って歩かれた。水が溜まっていたので、天皇の長靴を濡らした。

坑道が終ると、白セメントの壁にはさまれた、幅の広い廊下に出た。天皇の濡れた靴が、寄せ木の床下に足跡を残していった。

鋼鉄製で、厚さが三十センチもある大扉を開くと、すぐまた木製の扉があった。

天皇がなかに入られて、六曲一双の金屏風の前に置かれた椅子に座られると、集まっていた出席者一同が最敬礼してから、着席した。玉座の前に、コの字型に机が置かれていた。

これから、最後となる二回の最高戦争指導会議が開催されるが、軍部は天皇が終戦の決断を下されることを、まったく知らされていなかった。

この御前会議が始まってからの百八時間が、大日本帝国の断末魔となった。

明治維新が成就して、明治元年に改元されてから、七十八年目だった。

天皇に向かって右に、鈴木貫太郎首相、阿南惟幾陸相、梅津美治郎陸軍参謀総長が並び、平沼騏一郎枢密院議長、米内光政海相、東郷茂徳外相、豊田副武海軍軍令部総長が向い合って、座った。その後列に、迫水久常内閣書記官長、吉積正雄陸軍軍務局長などの連絡会議の幹事が座った。

天皇は前に置かれた机の上に、軍帽をのせて、細かく顔を震わせていられた。

鈴木が迫水に『ポツダム宣言』の全文を朗読するように、命じた。書記官長は、今日の官房長官に当たる。

迫水は立ち上がると、「一、われら合衆国大統領、中華民国政府主席、およびグレートブリテン国総理大臣はわれらの数億の国民を代表して協議した結果、日本国に対し、こんどの戦争を終結する機会を与えることで、意見が一致した」と読みあげはじめたが、とめどもなく涙が溢れ、泣き声になった。

天皇に連合国の宣言の苛酷な文言をきかせるのが、あまりにも忍びなく、ところどころ

で泣きじゃくった。

「二、合衆国、英帝国および中華民国の巨大な陸、海、空軍は、西方より自国の陸軍、空軍による数倍の増強を受け、日本国に対し最終的な打撃を加える態勢をととのえた……」

それでも、迫水は日本が連合国によって占領されるとか、「日本国の主権は、本州、北海道、九州および四国とわれわれがきめる諸小島に局限される」といった条項を、何とか読んでいった。宣言は「これ以外の日本国の選択は、迅速、かつ完全な壊滅しかない」と、結ばれていた。

鈴木は迫水が読み終ると、東郷を指名した。

東郷は「天皇陛下の地位に変化がない」ことを前提に、無条件受諾を主張した。

次に、阿南が指名され、「私は外務大臣の意見には反対であります」と前置きして、敵が上陸すれば、本土決戦において「徹底的打撃」を与えることができると、いった。それでも、国体の護持、自主撤兵、戦犯の自主的処罰、占領しないという条件付きであるなら、受諾してもよいと述べた。国体は、天皇制のことである。

続いて、米内と平沼が東郷を支持した。梅津、豊田の意見は、阿南と同じものだった。

会議は三対三に分かれ、一同は、鈴木が口を開くのを待った。

七十八歳になる老首相が、背を丸めて立ち上がり、「本日は列席者一同、熱心に意見を開陳いたしましたが、いまに至るまで意見はまとまりません」と、ゆっくりと話しだした。「これ以上は遅延を許されないので、まことに畏れ多いことではございますが、ここで天皇陛下の思召しをおうかがいして、会議の結論といたしたく存じます」といった。

鈴木が会議の最後に、天皇の聖断を仰ぐことは、天皇、木戸幸一と打ち合わせていたことだった。東郷も知っていたが、軍人たちはまったく異例のことだったので、茫然としていた。

昭和天皇は即位されてから、それまで公の会議において、決定する意見を述べられたことは、過去に一度もなかった。

天皇は、「それならば、わたしの意見をいおう。わたしは外務大臣の意見に、賛成である」といわれた。

そして、大東亜戦争が始まってから、「陸海軍とも、予定と結果とが、どうもちがう」、本土決戦には勝つ自信があるというが、参謀総長の報告とちがって、九十九里浜の防備すらほとんどできていない、兵士に銃剣すら行き渡っていない、このような状態で、本土決戦に突入したら、どうなるか、どうして、この日本という国を、子孫に伝えられるのだろ

うか?」といった。

やがて、全員がすすり泣きはじめた。

「……堪え難いこと、忍び難いことであるが、わたしはこの戦争をやめる決心をした……」

天皇は、白手袋をはめた右手で、はじめ眼鏡を拭っていられたが、頬を走る涙の線をおさえようとしていた。

「自分のことや、皇室のことなど心配しなくてもよい」

もう、部屋の中のすすり泣きは、号泣にかわっていた。何人か、ワーッ、ワーッと、子供のように大声をあげて、泣きはじめた。

十日の午前二時二十分に、なっていた。鈴木が立って、涙をこぼしながら、「会議は終りました。ただいまの思召しを拝しまして、会議の結論といたします」といった。

政府は御前会議の決定を受けて、ただちに、スイス、スウェーデン政府を通して、アメリカ、中国、イギリス、ソ連に対して、「天皇ノ国家統治ノ大権ヲ変更スル要求ヲ包含シ居ラサルコトノ了解ノ下ニ」、『ポツダム宣言』を受諾するという、回答を発した。

未遂に終わったクーデター

私は、いまから四十年前に三十代だったが、昭和二十年元日から、昭和天皇を囲んでいた皇族、側近者、政府、陸海軍幹部をはじめとして百人以上に、長時間のインタビューを行って、日本がどのようにして、あの困難をきわめた時期と取り組んだのか、ノンフィクションをまとめた。

昨年九月に、宮内庁により『昭和天皇実録』が発表された。

宮内庁が二十四年を費やして、昭和天皇の御生誕から崩御されるまで、毎日の御動静について編纂した、厖大な記録である。

私は、『昭和天皇実録』の昭和二十年八月十四日の記録を読んで、衝撃を受けた。

「午前八時五十八分、御文庫において参謀総長梅津美治郎に謁を賜い、ソ聯邦の参戦に伴う支那派遣軍総司令官への命令につき上奏を受けられる。なお前夜、陸相阿南惟幾は陸軍省軍務局軍事課長荒尾興功ほか陸軍将校五名よりクーデター計画を聴取し、その決行につき具申を受ける。

この日午前七時、陸相は軍事課長とともに参謀総長に対し、本日午前十時より開催予定の御前会議の際、隣室まで押しかけ、侍従武官をして天皇を御居間に案内せしめ、他者を

監禁せんとするクーデター計画兵力使用第一案の決行につき同意を求めるが、参謀総長は宮城内に兵を動かすことを非難し、全面的に反対する」

もし、この時、梅津大将がクーデター計画に同意していたとすれば、その後の日本の針路が、大きく変わっていたことだろう。

アメリカ軍が上陸して、本土決戦を行っていたとしたら、一千万人以上の国民が死傷し、ソ連軍が北海道を占領したにちがいない。そして、天皇制を維持することができなかっただろう。

本土決戦か否か

昭和天皇が第一回目の終戦の御聖断を下した翌日に、戻ろう。

昭和天皇が終戦を命じられたのにもかかわらず、この朝の全国の新聞に「断乎神州護持の聖戦を戦ひ抜かんのみ」という、陸軍大臣訓示が大きく掲載された。このころになると、新聞は用紙が欠乏していたから、朝刊しかなかった。

午後、阿南陸相が御文庫において、天皇に拝謁して、「今次の戦争終結については、国体護持に大いなる不安があります。軍は本土決戦の勝利の成算が、十分に御座居ます」と、申し上げた。

この年の四月一日に、アメリカ軍が沖縄に上陸していた。

大本営は沖縄が失われれば、アメリカ軍が本土に来攻することを想定して、敵によって本土が分断された場合に備えて、第一総軍と第二総軍を新設して、第一総軍が東海地方から東北まで、第二総軍が九州、四国から中部地方まで担当することになった。北海道は、北部軍のもとに置かれた。

軍は臆面もなく、「一億総特攻」を叫ぶようになった。当時の朝日新聞の紙面から、『主婦之友』の表紙まで、「一億特攻」の文字が躍っていた。

四月に、阿南陸軍大臣が布告した本土決戦のための「決戦訓」は、次のようにうたっていた。

「皇軍将兵は皇土を死守すべし。皇土は天皇在しまし、神霊鎮まり給ふの地なり。皇国将兵は一億戦友の先駆たるべし。一億同胞は総て是皇国護持の戦友なり」

また、大本営陸軍部が同じ月に発した「国土決戦教令」は、必要な場合、軍が国民を殺すのに躊躇してはならないと、命じていた。

「敵ハ住民、婦女、老幼ヲ先頭ニ立テテ前進シ、我ガ戦意ノ消磨ヲ計ルコトアルベシ。斯

カル場合我ガ同胞ハ己ガ生命ノ長キヲ希ハンヨリハ、皇国ノ戦捷ヲ祈念シアルヲ信ジ、敵兵撃滅ニ躊躇スベカラズ」

根こそぎ動員が行われ、名ばかりの師団が編成されていった。

終戦時に、第一総軍の第三百八師団は、「小銃装備は五分の一程度、銃剣は七分の一程度」であり、「被服は一とおりであったが、靴は作戦用として温存し、自製のわらじなどを平時は使用する」ことにしていたと、報告している。

軍は敵が上陸すれば、一度は水際で撃滅できると、豪語していた。そして、敵上陸に備えて、全国にわたって部隊をあげて昼夜、洞窟陣地を掘らせていた。

五月に、『朝日新聞』は「戦車数千来るとも　我に必殺の備え　空爆砲撃にも泰然」という見出しを掲げて、「わが本土の築城はその総てが地底深くある。従って敵戦艦の主砲が如何に連日連夜の猛射を続けたとしても徒に地表の土を掘り返すだけで、わが地下の陣地には聊かの影響も与えるものではない。敵の爆撃また然りである」と、述べていた。

朝日新聞によれば、これらの地下壕は「戦略思想の一大飛躍」であり、記事は「来れ！　米畜」と結ばれていた。

六月には、九十九里浜正面の防衛を担った第三十六軍が第一総軍に「自隊作成兵器」数について報告していたが、その中に「槍一五〇〇本」と記載されていた。

六月中に、沖縄において日本軍の組織的抵抗が終わり、沖縄がアメリカ軍に奪われた。九万人以上の日本将兵が戦死し、十万人以上の民間人が死傷した。

七月二十五日に、東京において第一総軍が、幕僚副長会同を催していた。第一総軍に属する軍、方面軍、師団の参謀、副長全員が参加した。

この席では、まず第一総軍参謀長の須藤栄之助中将が、敵軍を水際で撃滅すべきことを強調したうえで、出席者にあらかじめ配布された軍通達を、幕僚が読みあげた。

「一、決戦思想　敵水際陣地附近ノ弱点　攻勢ニ徹ス。二、断乎タル攻勢ヲ躊躇シナイ。1、高級指揮官幕僚ニ於テ大東亜戦争ノ本旨ヲツカマズ必死ノ闘志ヲ欠ク。死ヌマデ攻勢ヲトル。敵ヲツブシテシマフマデ一兵ノ残ルマデ攻勢ヲトル」

八月十二日未明に、連合国の回答が放送によって、傍受された。「天皇の権限は、連合国最高司令官の制限の下に置かれる」というものだった。午後六時過ぎになって、スイス駐在の日本公使から、連合国回答の正式文が打電されてきた。

外務省は連合国の回答文のなかの「サブジェクト・ツウ」を、「制限の下に置かれる」と訳したが、軍部は「隷属する」という意味だといって紛糾し、連合国に「再照会」した

うえでなければ、『ポツダム宣言』を受諾できないと、主張した。

最後の御前会議

連合国の回答を受けて、十四日午前十一時から、最高戦争指導会議の構成員に、閣僚を加えて、同じ吹上付属室で、最後となった御前会議が開催された。

この四十分前に、天皇は御文庫において、永野修身軍令部総長、第一総軍司令官杉山元・元帥、第二総軍司令官の畑俊六元帥の三人に対し、本土決戦の勝算について、たずねられた。

『昭和天皇実録』は、「永野・杉山より、それぞれ国軍はなお余力を有し、士気旺盛につき、上陸する米軍を断乎撃攘すべき旨の奉答」をきかれたが、畑元帥が「担当正面の防御については遺憾ながら敵を撃攘しうる確信はなく」、『ポツダム宣言』受諾もやむをえないと申し上げたと、記している。

午前十時半になると、もう暑かった。モーニング、軍服、国民服、背広とまちまちの服装の閣僚たちが、御文庫の東口玄関の前で、分乗してきた車を降り、一列になって、地下へ降りた。

吹上付属室の会議室は間口が六メートルに、奥行きが十メートルほどあった。玉座の前の赤絨毯の上に、二十三個の椅子が三列に並べられていた。

やがて、侍従武官長の先導で、天皇が入ってこられた。

天皇は軍帽を前の机の上に置かれると、座った。お顔を神経質そうに、細かく震わしていられたが、それがかえって神々しく見えた。

鈴木は、はじめ、九日の御前会議以後の経過を、陛下に手短かにまとめて言上した。

「閣議では、約八分が連合国からの回答を、そのまま受諾することに賛成しておりますが、まだ、全員一致をみるに至っておりません。このようなことで、重ねて叡慮を煩わし奉るのは、臣下としてたいへん罪深いことと存じ、お詫び奉ります。しかし、ことは、すこぶる重大でございまして、緊急を要しますので、この席上にあらためて反対の意見ある者より、親しくお聞きとりのうえ、重ねて何分かの御聖断を仰ぎたいと存じます……」

こういってから、老首相は阿南陸相を指名した。

阿南は立ち上がって、話しはじめると、途中で涙声になった。

このまま終戦を迎えれば「国体の護持」について不安があるので、連合国に詳しく照会してみるべきである、「僅かでも疑念があるようなら、死中に活を求めて、戦い続けるべ

きであると、考えております」といった。阿南は戦い続ければ「軍はまだ会戦では敗れていない」ので、「勝算」があると、血色のよい頬を震わせて、声涙ならび下る熱弁を振るった。

阿南はこの朝七時に参謀本部に乗り込んで、梅津参謀総長に天皇を拘禁して、全軍を動かしてクーデターを行い、本土決戦を戦うように迫ったことは、曖昧にもださなかった。

天皇は、阿南が泣きながら訴えるのに、いちいち強く頷かれた。そのうちに、天皇の頬にも、阿南が泣くのを見て、涙が伝わり始め、眼鏡をしばしば押えられた。

阿南が座ると、鈴木はまた立って一礼し、梅津を指名した。梅津も泣きじゃくりながら、軍はまだ敗れていないといった。

もう会議室にはすすり泣く、低い声が満ちていた。天皇の涙を見て、泣かない日本人はいない。

一時、会議室の泣き声が、やんだ。鼻をかむ音が、ところどころでした。

梅津が着席すると、鈴木が自分の名を呼ぶのを待って、豊田軍令部総長が立ち上がった。豊田も、このままでは「国体護持」ができないので、照会して満足できる回答がこなければ、戦うべきである、といった。

三人の将官とも、敗戦を招いたことについて、一言も詫びなかった。いたずらに、「死中に活がある」とか、「神国」とか、「勝算」といった言葉を、繰り返した。

「反対の意見を述べるのは、これだけでございます」

鈴木のゆっくりとした、声がした。

それを待って、天皇が口を開かれた。

「ほかに、意見がないようだから、わたしの意見を述べる。みなの者は、わたしの意見に賛成してほしい」

天皇の声は抑揚や区切りかたが、常人と違った。とぎれとぎれだった。

また、天皇は泣いていた。時々、白手袋をした右手を、頬にあてて、拭われた。

「三人が反対する気持は、よくわかった。その趣旨も、わかるのである。しかし、わたしの考えは、この前にいったのと変りがない。これ以上、戦争を続けるのは、無理だと思っている……」

「みなは国体護持の問題について、それぞれおそれているようだが、要は、国民全体の信念と覚悟ができておるかどうかに、問題があると思うので、先方の回答は受け入れても、よろしいのではないか、と思う……」

部屋のなかの慟哭は、たかまっていった。

「陸海軍の将兵にとって、武装解除や保障占領ということは、たいへん辛い、堪え難いものである。国民が国のために玉砕して、殉じようとする気持も、よくわかる。しかし、わたし自身は、自分の身は、どうなってもよい。国民の生命を救けたい……」

天皇は、「日本と国民が生き抜く道が残っているならば、復興という光明をつかむこともできる。その道はたいへんけわしく、長いだろう、戦場へ行って死んだ者や、内地で不幸にも亡くなった者や、その遺族を思うと、わたしは悲嘆に堪えない、わたしも国民といっしょに努力しよう」と語った。

天皇は、突然、叫ぶようにいわれた。

「阿南、阿南、お前の気持はよくわかっている。しかし、わたしには国体を護れる確信がある」

天皇は悲痛な調子で、訴えた。

天皇は、また、先ほどの淡々とした語調に戻って、続けられた。

「……戦傷を負ったり、戦災をこうむったり、家業を失ったものの今後の生活を思うと、わたしは悲嘆に堪えない。このさい、わたしにできることなら、なんでもするつもりでいる……」

阿南陸相もせきあげ、しゃくりあげていた。

「もし、わたしが直接、国民に呼びかけることがよければ、マイクの前にも立とう。国民は今は何も知らないのだから、和平を結ぶことをきくと、きっと動揺しよう。陸海軍将兵には、さらに動揺も大きいだろう。なだめることは、たいへん困難であろうが、どうかわたしをわかってほしい。わたしは、何でもいとわない。何でもする……」

もう椅子から落ちて、床に蹲って泣いている者もある。嗚咽する声は、競うようにたかまっていった。

八月十五日正午に、全国民がラジオの前に集まった。

「ただいまより重大なる放送があります。全国の聴取者のみなさま、ご起立願います」

「天皇陛下におかせられましては、全国民に対し、畏くもおんみずから大詔を宣らせ給うことになりました。これより謹みて玉音をお送り申します」

アナウンサーの声が終ると、荘重な『君が代』が流れてきた。

天皇の当時、玉音と呼ばれた声が、電波にのって運ばれてきた。

「朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ……」

国民は、天皇の肉声を、はじめて聞いた。

「……国体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ体セヨ」

と、天皇が結ぶと、また、『君が代』が物悲しい調子で、鳴った。

「謹みて、天皇陛下の玉音放送を終ります」アナウンサーの声が続いた。「畏くも天皇陛下におかせられましては、万世の為に太平を開かんと思召され、きのう政府をして、米英支ソ四国に対してポツダム宣言を受諾するむね、通告せしめられました」

「この未曾有の御事は、拝察するだに畏きわみであり、一億均しく感泣いたしました。われわれ臣民はただただ、詔書の御旨を必謹、誓って国体の護持と民族の名誉保持のため、滅私の奉公を誓い奉る次第でございます…」

第二章　仕組まれた対米戦争の罠